



木下尚江著作集

第二卷

明治文獻

木下尚江著作集第3卷（第七回配本）

昭和四十四年十一月三十日第一刷発行©

定価二二〇〇円

著者 木下尚江
発行者 藤原正人

発行者 株式会社 明治文献

東京都豊島区南池袋2丁目8番5号

振替・東京36290番

電話・東京(084)0521

印刷 江明印刷所
製本 昭栄堂

小説 良人の自白

木下尚江著

(臺の一)

時は七月なつづきの十日、

日はカンカンと照り輝いて、朝から汗を絞る様だが、天は眞青に晴れ渡つて、見る目には又た頗る快くもある、本郷の大通り帝國大學の正門には、大きな日章旗高く翻へり廣き街道は暫ばし車馬の往來を制して、其の兩側には長く人垣を築き、白装の巡查は數間措きに佇立して持場々を警めて居る、正門の中には大學總長以下教授職員學生、各省大臣朝野の紳士來賓の面々、同じく兩側に列を正して立つて居る、今日は則ち帝國大學の卒業式を舉行せらるゝので、學事到大御心を注がせ給ふ陛下の特に行幸ましむすのである、大時計の短針が雲際に十一時を指さんとする時、南の方に當て、日に映つる錦旗の光が遙に

目を射た、銀色に輝くは近衛の鎧の穂先でもあらうか、
 警官一騎、額上の汗拭ひも敢へず驅けて來た、其れと同時に街側の巡查は嚴かに劍を按して
 叱つゝと俄に警戒をする、堵の如き觀衆は、傘を撤する、帽を脱する、俄に雑談の腰を折
 る、周章で、欠伸を半ばで飲み込む、門内の行列でも禮服の衣紋を正だし、鬚の毛並を調へ
 咳拂ひをなし、口を拭ひなどして、忽ち森と水を打つたる如き嚴肅の天地となつた、
 鹵簿正々肅々として此の忠愛なる良民の誠意の眞中を打たせ給ふのである、白髮の老侍従を
 陪乗せしめ給へる陛下の龍顏特に麗はしく、鹵簿愈々正門を入つて兩側の最敬禮を受けつゝ
 静々進ませ給ふ時、庭園の一方に控へて居た樂隊は、突如天地の無言を破つて『君が代』の
 國樂を奏し始めた、其の囀朗たる清き音波の傳はると均しく、門外觀衆の間には彼處にも此
 處にも期せずして『萬歲』の歡聲湧き上つた、
 門内の人衆は陛下の便殿に入らせ給へる後に從つて、ガラ／＼流るゝ汗を拭き／＼一同校堂
 に立ち返つた、廣き庭園は只だ馬車腕車に填められて、馬の嘶き遠近に響くばかり、門の外
 には兩側の人の壁一時に崩れて、又た忽ち暑苦しき雑踏の平常の街衢に立ち戻つた、

今や式の擧げられる時分であらう、赤煉瓦の大建築は森嚴に、焼くが如き日の中に峙つて居る、と、見ると怪しくも正門差して悄然出で来る一個の青年がある、年の頃廿四五、校帽の下に濃き眉を顰め、唇は固く結んで居るが、蒼ざめたる頬の肉は何處やら慄を帯んで見へる、兩手をばポケットに納れたまゝ、頭を垂れて力無げに歩を運んで居る、——此の歡喜を以て満たされたる今日の大學に、如何なれば彼のみ斯く憂色を見するのであらう、彼はやがて頭を擡げた、けれども其の目は閉ぢて居た、

『左様、卒業したと云ふのだ、法科大學を卒業したと云ふのだ、——其れが何だ——何か出来るのだ、何をしたらば可いと云ふのだ——が、元來何故に法律など學んだのだ、何を目的に此の白井俊三は、特に法律など擇んだのだ、』

獨語したる彼は、又た唇を噛みめめ、頭を垂れ、怪訝顔に凝視める門側の警官などには心も付かぬが如く、遂に大國旗の交叉されたる正門をくゞり抜けた、

忽ち耳を貫く喧囂に、彼は遽然其眼を開いたのである、
鞭聲塵を煽つて馬車が駈け去る、すれ違ひに風を切つて自轉車が飛び行く、腕車は引ツ切り

なしに往來する、挽く者は瀧の如く汗になつて走しるが、車上の客は幌の裡に蓑など吹かして居る、山の様な荷車を小さな丁稚が眞赤になつて押して行く、着飾つた娘も行く、萎びた様な老婆も行く、書生も行く、労働者も行く、乞食も行く、實體の知れぬ怪しげな漢子もノソソ行く、何が忙がしいのか、此の日盛りに、

白井は黒眸勝もの大きな眼を見張つて、凝乎と眺めて居た、

『——あ、是れが社會か、——明日から僕も此の裡の人となるのだ——が、何を爲して可

いのであらう、其の方角さへも判らない、——何が學業優等、——馬鹿ッ』

彼は振り返つて庭から校舎から見廻はした、流石懐かしげに黙つて眺めて居たが、學堂の奥には今更如何に儀式的の進行して居るとぞ、樂隊の笛の音、響き來るや否や、白井の眉俄に動き目は吊り上がつて、憤懣の色は忽ち彼れの面に漲つた、

『讀書三年——白痴幾百ッ』

見向きもやらず、彼はスイと森川町を右に折れたが、何時しか又た悄然たる初めの白井に返つて、千駄木林町の人なき裏町を寂しげに辿つて居る、

(臺の二)

千駄木林町も今は年々人家新たに建ちて逐々町屋らしくなつて來たが、尙ほ幾年經たる老樹鬱蒼として、翠滴るばかり、涼しき風徐るに木の間を吹いて、二三丁先きなる紅塵萬丈の都會は何處だやら、

此方から行つて左側街に沿ふて立てられし二階造り、軒燈に「増田」と書いたる下宿屋の格子戸を開けて顔を出したのは、未だ十二三ばかりの色白ろの可愛い女の子、房々した髪を白地の單衣の肩に垂らして、凜然とした目で一寸眺めたが、

『母さん、白井さんが歸つてらつしやつてよ』

と一聲高く叫んだやう、忽ち格子戸の中へ姿を隠した、

若しも此の小娘の澄み渡る聲が無かつたなら、白井俊三は或は我宿の前を俯いたまゝに過ぎ去つたかも知れない、彼は愕然として頭を擡げたが、急に歩を轉じて、今しも少女が明けはなしにして引つ込んだ格子戸を這入つたのである、
少女は嫣然と豊かな頬に笑を湛へて框に立つて居た、

『白井さん、私ほんとに待つてましてよ。何度出て見たか知れないワ、——見せて下ださいな、免状を、そして下賜の御時計も子』

少女は白井の面をのぞき込んだが、彼は只だビカリと黒き眼を光らせたばかりで黙つて腰掛けて、屈んで編揚げの靴の紐を解くのである、
少女は眼を圓くして白井の後姿を目成つて居た、白井は卒業證書も、優等生に賜はる筈の時計も何も持つて居ない、持つて居そうにも見へぬのである、
我が女の聲に水仕事の手を前垂で拭きながら、イン〜と出て來たのは、四十格恰の愛相よき丸髷、

『をや、白井さん、お歸りなさい、最早式が濟んだのですか、大層お早う御座んしたのねエ』
と言ひつゝ、茫然立つて居る少女を顧みた、

『八重、お前さん、如何したんだ子、其様面など膨らすものぢやありませんよ』
去れど八重子は黙つたまゝで瞬きもせぬ、
靴を脱ぎ了つた白井は、クルリと向き直つて立ち上つたが、主婦と見合つて一寸目禮したき

り、直ぐ目を逸らして逃げる様に二階へ上つて仕舞つた、其の後影を見送つて、主婦も暫ばし黙つて立つて居たが、八重子は小聲に母の袂を引いた、

『母さん、何か怒つて居らつしやるんだよ、兄さんは』

『其様方じや無いのだからネ』

と主婦は首を傾けながら

『無ど汗におなりなすつたことだらう、八重ちゃん、浴衣を出してお上げなさいよ』

『私いや、今日は白井さん、彼様こわい目をして居らつしやるんだもの』

と、少女は泣き出しさうな顔して何處へか去つた、

主婦は帳場に片膝ついて、煙草盆を引き寄せた、

『ほんとに如何なすつたんだろう子、五年も居なさる中ついぞ、今の様な顔見せなすつたことが、無いんだもの、兎に角今日は御苦勞なすつた卒業式で、天子様から御褒美さへ頂きなされると云ふ一生の贖れの日だけに——何か變事でもあつたのじや無からうか、お歸りも餘まり早過ぎるし』

二三服フウと烟を吹いたが、

『若しや洋行の方の話が手違におなりなすつたのか、尤も官費の洋行などは眞平御免だと言つてらつしやるんだから——其れとも彼様は仰つしやつても、矢張りお胸の底には松野嬢のことが蟠つて居なさるのか知ら、男つてものは随分心にも無い氣強いことを口にするものだから子、——けれど松野嬢もお可哀そうなものさねエ、彼様立派なしつかりした方は、今時の女學生に在りやしないのだもの——あゝ何故世の中つてものは斯う丁度に行かないだらう』

茶蒲臺に寄りかゝつて、主婦は其れから其れへと思ひやりして獨語いた、
夏季の休業で書生が歸郷つた迹の、下宿屋の晝の寂しさ、『あゝ——』と力なき白井の吐息が、
二階から洩れて来る、

主婦は兩手に額を支へて目を閉ぢた、

(臺の三)

其の翌日の夕方、下宿屋増田の格子戸を這入る一個の若者は、昨日白井俊三等と共に新に法

學士がくしになつた木村茂作きむらもさく、年は白井しらゐよりも一つ二つの兄あにであらう、新調しんてうらしき黒緞くろとんの五つ紋もん、ビシヤリ戸こを閉たて、

『イヨウ、今日は』

餘念よねんなく帳面ちやうめん繰りひろげて居た主婦おかみは、美しく結ゆつた丸髷まるまげをヒヨイと擡あげて

『あら、木村さん、——もう悉皆すつかりお召めし換かへ、天晴紳士あつぱれしんしさんですよ』

『冷やかしちや不可いかん』と笑わらひながら『白井しらゐは居ゐませう子』

と早はや階子はしごへ片足掛かたあしくるのを、主婦おかみは上うは目遣めづひに制せいして、左手ひだりてで一寸招ちよつこまねいた、木村きむらは拔足ぬきあしさし足あしして、帳場ちやうばの前まへに蹲うづまつた、

『如何いしたんだ、主婦おかみさん』

『實じつは木村きむらさん、貴方あなたの御入來おいでを一日千秋いちにちせんしゅうで御待おまち申まをして居ゐましたの』

『其それは近頃ちかごろ以もつて難あう仕合たいしあだが、理う由りゆうを承うけたまはらぬと、少すこし安心あんしんが成ならないネ』

主婦おかみはいと聲こゑを低ひめて

『何なに子、白井しらゐさんのことですが子、昨日きのふの朝出あさでて行ゆきなさる時ときまでば平常ふだんの通とほりで別段御べつだんお

變りもありませんでした、お歸りなすつてからの御様子が無何も變なのですよ、夕飯も召し上がらず、夜ツびて唸つて居らつしやいました、穩然お眠りもなさなかつたかと思はれますの、今日も飯は嫌だと仰つしやるから、叱る様にして無理に卵のお粥など差上げました、木村さん、何か變つたことでもお出来なすつたのぢやありませんか——彼の通りの御氣質で在らつしやるから、私共には何も仰つしやらず、どれ程心配だか知れたものぢやありませんの』

『であるから我輩の御入來を一日千秋か、何れ其様ことだらうと思つたんだ』

『木村さん、冗談ぢやありませんよ、貴方の爲めには兄弟同様の御友達でせう、申しちや失禮ですけれども、自宅などでは決してお客様とは思つて居りません、娘などは全然眞正の兄様の様に思つて居ます、私にしてからが、どうやら血を分けでもした身内の様な氣がして居るぢやありませんか』

一本參られて、木村は膝を正した、

『其りや我輩とても同然です、今日も實は其事で來たのだ、今朝から來たい——と思つて

も種々な奴等に攻め掛けられるもんだから子……昨日も朝の中、白井の顔が見へて居たのサ、成程血色は良くなかつたが、彼れ近頃蒼い顔ばかりして居るものだから格別氣にも留めなかつたが愈々式場へ列して見ると、彼が居ない、で、後で非難の聲も大分盛で子、不敬だなど、罵倒した教授屋もあつたそうだが、然かし主婦さん、白井の身になれば充分不平も有りませうサ、今度の留學生の一件にしてからが子、聞いたでせう』

『否エ、ぢや、あの平尾さんとか仰つしやる氣取屋さんが、愈々洋行とお定りなすつたのですか、酷いことねエ——ですが木村さん、白井さんは平常、官費洋行なんて下らないツて、口癖のようにして居らつしやるのですから、其の爲めに不平の何のツてこと無いと思ふんですよ』

『さア、が、其處には又種々と魂膽もあるんだから子、其れに愈々卒業となれば、郷里では例の結婚問題が待つて居るでせう、考へて見りや、白井も可哀さうなものさ子、想ふに分れ思はぬに逢ふ、其れも畢竟は金故だ、三十日の金に曉の鐘——』

『さア、貴方はほんとに氣樂屋さんですよ、白井さんの様な生真面目な方と、貴方見たいな

方と仲の善いのが私、不思議でならないの』

『憚りさま、我輩の様な不信用な男が付いて居たればこそ、白井の生命も今まであつたと云

ふものサ』

『さ、其の生命の親の木村大明神、何卒我子俊三の苦勞の胸の安まります様に予』

木村はニユツと拳固突き出して空を殴つた

『淀君ッ!』

ヒヨイと主婦は身を引いて笑ましげの目でキツと睨まへた、

『長門、無禮ッ!』

木村は思はず兩手で頭を叩いて立ち上がった、

『驚いた子、然らば我君白井内大臣秀頼公の御機嫌を、伺ひ奉るとしよう』

妙な身振りして、やがてトン／＼と二階へ上がつて行つた、

『面白う方ね』

と主婦は煙管ボンと叩いて暮れ行く戸外の景色を眺めて居たが、

『三やく、——八重は居ませんか』

(臺の四)

六疊の二階の一室、臺洋燈を真中に、洋食の皿が六枚七枚散亂して居る、白井俊三は腕を組んだ儘柱に凭れて居る、木村茂作は黒貂の羽織、後ろに脱いで、肉叉を左手、ニツプを右手の大あくら、宿の主婦は團扇を探て二人を等分に煽いで居る、

下女が盆へ載せて又一本ビールを持つて來た、木村はチロリと横目に睨んで

『どうも相濟まんよ、主婦さん、お酌が好いもんだから子、つい思はず傾け過ぎす様な譯で』
主婦はホッホと笑つたのである、

『學士つてものは、大層御遠慮深くおんななさるもの子、まあ心ばかりの寡婦の御祝なんですから、何卒、』

『いや、君の——主婦さんの眞實は謹で頂戴致しますよ、是れで白井が一杯も遣る様だと、頼母しいのだが、好男子惜むらくは個中の趣味を解せずと來てるんだから子』
と言ひつゝ、泡立つ一盞をグツと傾けて、

『そこで主婦さん、其の留學生一件も子、——白井は彼様淡泊なこと言つてゐるが、尤も當事者なんだから、餘り愚痴ッばく言はない方が美德には相違ないが——其の言ひ分が癪だろ うじや無いか。』白井君は健康が不適當だから、べら棒、じや、平尾の諂諛漢奴、何處を押せば無病息災の音が出るんだ、胃病で、脚氣で、痲痺で』

木村は又た一盞を干して下に置いた

『なア、白井、畢竟君の民主々義が其筋の御機嫌に觸れてゐるんだから、仕方が無いサ、で、昨日なども實に滑稽極まるんだ、君の舉動に就て子「不敬」で御座るの「畏れ多い」で御座るの「大學の體面に關する」で御座るの、ヘン、口舌税が設けられないと思つて勝手な熱を吹きやがるのさ、じや、彼奴等が何だ、糟糠の妻を打棄つたり、泥棒の娘を媽大明神と拜んだり、下女は姪ませる、淫賣は買ふ、其れで拙者は大學の教授、天下の教育者、乃公の學說に一點たりとも相違する所あれば、落第申付けると、——何處に學問の研究が在るんだ、思想の自由があるんだ、何かあれば「不敬」の一と威どし』

木村は一人して熱罵を逞ふしたが、忽ちハタと手を拍てカラ／＼と高く笑つた、